
原著論文

歩行発達に関わる育児用具の利用を巡る考察
：歩行器の問題に着目して

白 神 敬 介^a

Discussion for the use of child product related to motor development
: focusing on the problem of infant walker

Keisuke Shiraga^a

(^a Graduate School of Human Science, Waseda University)

(Received : December 10, 2008 ; Accepted : July 15, 2009)

Abstract

This article examines the baby walker, a child product related to the development of walking in infants, and the present status of baby walker use. First, the history of the baby walker and cultural differences in its use are explored. Although the baby walker was first brought to Japan during the Meiji Era, it did not come into widespread use until the 1970s. As a result, problems associated with baby walker use have been realized gradually. Second, the influence of the baby walker on child development and the potential for walker-related accidents are reviewed. The effects of baby walker use on infant development remain controversial. It is thought that injuries related to baby walker use are caused by a contradiction between the purpose of the walker and its function. More discussion of the necessity of baby walker use in Japan is required. The present article confirmed that, if baby walker use is to be continued, the safety of the baby walker must be improved.

Key Words : child product, motor development, injuries, baby walker, view of child care

はじめに

育児を取り巻く環境は時代によって様々である。現代の日本社会に目を向けると、「密室育児」や「虐待」といった育児に関わるネガティブな話題が多く見られるものの、こうした育児の閉塞感を肩代わりするかのように育児産業が隆盛している。育児に携わる家庭には、子どもを楽しませ、養育者の負担を軽減するために作られた育児用具が溢れ、現代の育児においてこうした育児用具は必要不可欠な存在に

なっているといつてよいだろう。そのため、子どもの発育・発達を捉えるうえで育児用具は切り離すことのできない重要な要素である。歴史を振り返ると、古来から多くの育児用具が発明され、利用されてきた。それは当時の発達観や子ども観に基づいた必要性の産物である。

歴史・文化的に見れば、発達や子どもに対する考え方は多様である。しかし、養育者にとって子どもの発達が大きな関心事であることには変わらない。

^a 早稲田大学大学院人間科学研究科 (Graduate School of Human Science, Waseda University)

そのなかでも子どもがひとりで歩けるようになることは、特別な関心を向けられることが多い。そのため、子どもが歩けるようになるための道具の発明・発展は、育児観・子ども観を強く反映しているように思われる。

こうした育児用具は、現代の育児において不可欠に存在しており、それらが実際の育児のなかで果たす役割は様々である。こうした役割の重要度に応じて、各育児用具の必要性や利用に関する検討がこれまで進められてきた。本論でもこうした育児用具の必要性という点について、時代背景や文化的要因を考慮に入れて検討を進めることとする。

本論文では、育児用具を各時代の育児観の表現型とみなし、とくに歩行発達と関連する育児具として歩行器を取り上げる。歩行器は多様な文化で用いられてきた育児用具であるため、その利用に関わる問題については多くの国で調査が実施されている。そこで本論では、歩行器の歴史的変遷やその使用に関わる問題を扱った研究のレビューを行い、多文化の事例を参照することで、本邦で検討すべき課題を明確化していく。歩行器の使用においては特有の問題

があり、この問題を考察することは現代の育児環境を捉える視点になりうる。そして、これらの育児用具の必要性を現代日本における歩行発達への意識と関連付けて論じることとする。

様々な歩行援助の道具

まず、最初に乳児の歩行に関わる道具の多様性を見ておくことにする。

Phillipe Arièsが著した『子供の誕生』¹⁾に見られるように、ヨーロッパでは近代に至るまで子どもは「小さな大人」として扱われ、子どもであることが評価されるようなことはなかった。こうした態度は、子どもに対していち早く「大人」になることを要請していた。この結果、子どもに早いうちから独りで歩けるようになることへの期待が増すことになる。床を這いずりまわるのではなく、地に足を着けて二足で歩いている姿こそが人間であることの証であったからである。そして、子どもの歩行発達を補助するような様々な育児用具が開発された。

その一つとして、いわゆる「歩行器 (infant/baby walker)」と呼ばれる子どもを取り囲むような構造をしたキャスター付きの用具が最も知られている。

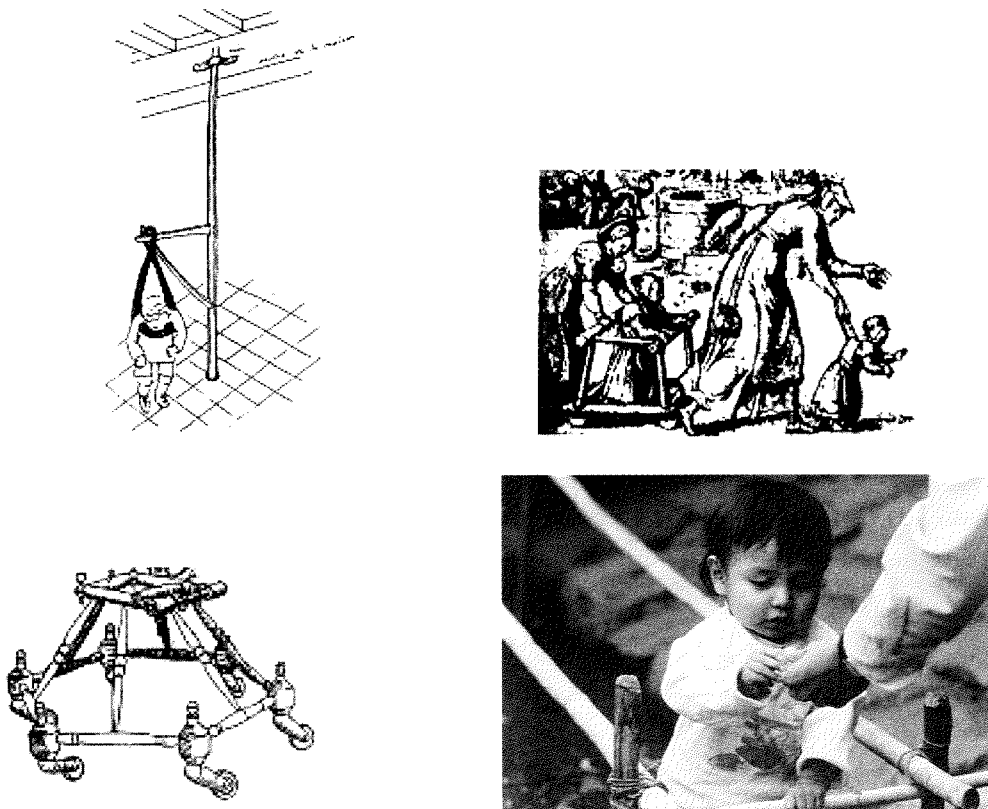


Figure 1 様々な歩行援助の道具
上左、トゥルニケ (トゥルナン)・上右、リジュール (図中右)²⁾
下左、ベビーケイジ³⁾、下右、グアテマラのwalking pen⁴⁾

あるいは、現代の日本ではあまり見られないが、歩行器以外にも歩行を促進しようとする道具は存在する。

たとえば、部屋の中央に回転する柱を立てて、その柱に取り付けられた枝状の棒に子どもを帯紐でつないで周囲を歩かせる「トゥルニケ（あるいはトゥルナン）」や、ひもを子どもの背中につけて犬の散歩のように背後からバランスをとって歩かせる「リジュール」といったものがヨーロッパでは使われていた²⁾。また、幼児の腰まわりを取り囲む骨組みだけのスカートのような形で車輪がつけられた木製の器具は、ベビーカートあるいはゴーカーと呼ばれ、子どもをまっすぐに立って歩かせるために用いられた³⁾。グアテマラのマヤ族では、トウモロコシの茎を二本平行に渡した歩行用の囲い(walking pen)のなかに子どもを入れて、食べ物のかげらなどで子どもを誘い出して前後に歩かせようとするものがある⁴⁾。

次節からは、現代でも大いに利用され、日本にも馴染みのある歩行器と呼ばれる育児用具を取り上げていくことにする。

欧米での歩行器の歴史

歩行器は、15～16世紀頃にはヨーロッパで使われていた記録が残っている。1482年のフランスで描かれたというBartholomeus Anglicusによる『Le Propriétaire』からの木版画「人生の諸段階」⁵⁾には、歩行訓練中の子どもとして、現代でいうところの手押し車に酷似した道具を使用している子どもの姿が描かれている (Figure 2)。また、16世紀に来日したポルトガル人宣教師Luis Froisが書き残した



Figure 2 木版画「人生の諸段階」⁵⁾

『日欧文化比較』には、「ヨーロッパでは幼児を眠らせるために揺籠を使い、歩くことを教えこむために小さな車を使う。」という記述がある。アメリカでも18世紀以前より歩行器が使用されており、早く大人同様に歩けるように子どもを矯正することを意図して用いられていた⁶⁾。

ヨーロッパ、そしてアメリカにおいては、四つん這いが動物的であるとみなされ、乳児が這うことを好まないという考え方があったため、乳児が立ちできるようにになれば歩行器をあてがうのが普通だったが、18、19世紀にはそうした歩行練習用機器の使用を禁ずる小児科医や児童学者も現れた⁷⁾。それは18世紀にJohn LockeやRousseauといった啓蒙思想家らの影響を受けて、子どもに対する見方が変化していったことを反映している。子どもに「天使のような」という形容詞が付されるようになったり、子どもが這行（ハイハイ）をしている姿に対しても肯定的な捉え方がされるようになり、その結果、19世紀頃には歩行器があまり利用されなくなったといわれているが⁸⁾、一方で日本にはこの頃、歩行器が伝えられることになる。

日本における「歩行器」の変遷

日本では、明治期になって歩行器の情報が伝えられ、明治40年代に市販された記録が残っている⁸⁾。この「歩行器」という名称が一般化したのは、日本に歩行器の情報が伝えられたよりもいくぶん後になる。公的な文書のなかに歩行器の名称が登場したのは、昭和23年に児童福祉法が施行された際であった。児童福祉法の福祉施設最低基準における保育所の設備に関する第50条の4に「乳児室又はほふく室には、室内滑台、椅子ぶらんこ、歩行器及び手押車を備えること」と明記された。その後、昭和49年に歩行器がSGマーク¹⁾の対象商品となってから、ようやく歩行器という名称は社会的な承認を受けたということができ⁸⁾、それまでは、同様の育児用具に関して様々な名称が付されていた。

加藤⁹⁾の調査を参照しながら、日本における歩行器の名称の変遷についてみていこう。大正6年に「乳児遊動器」の名称で歩行器と思しき用具が三越呉服店の販売広告に掲載されている。さらに大正11年の時事新報には、「核児用椅子」という名称で歩行器と同型の製品の写真が残されている。昭和6年ごろの

KK岡田の商品カタログには、「歩行助成器」の名称で籐製の歩行器が掲載されている。また、昭和41年の東京都意匠改善調査事業報告書・小児用乗物には、スチールパイプ製の歩行器に「ベビーサークル」という名称が付されていた。これ以前にも明治42年に三越呉服店でおこなわれた児童博覧会の出品目録には「保育車」という名称が残っているが、これが現代の歩行器にあたる用具を指していたかどうかは不明である。

日本において、名称が定まらないまま時をおきつつ歩行器が販売されていたということは、当時は歩行器の存在が一般的に認知されず、需要があまりなかったと推察される。ところが時を経て昭和49年に歩行器がSGマークの対象商品となる頃には、歩行器はかなり普及するようになっていたようだ。1977(昭和52)年には歩行器の生産量は約68万台で、日本人の赤ちゃんの約3人に1人に買い与えられていた⁸⁾。これは、当時のきょうだい数に鑑みれば、ほとんどの家庭に歩行器があったことになる。このように歩行器が受け容れられるようになった背景には、明治から昭和にかけて日本の育児観が変容していったことが考えられる。

日本の育児観と歩行器の受容

先述のように、日本で歩行器が使われるようになったのは明治期に入ってからだが、当時、歩行器はそれほど積極的には受け容れられてはいなかったようである。この理由としては、日本文化に歩行器という育児用具が馴染まなかったことが考えられる。そもそも明治期に歩行器が紹介されるまで、日本で歩行を助けるための育児用具が存在しなかったことは、日本における発達への考え方を反映しているといえるだろう。

日本の育児方法について、先にも紹介したLuis Froisは「ただ自然のあたえる援助を使うだけである」と指摘している。少し前にはあまり見られなくなっていたが、最近になって再度見直されるようになった「おんぶ」の習慣においても、欧米では見られない日本独特の養育様式の一端が見られる。江戸から明治時代にかけてこうした「おんぶ」の光景を見た外国人は、それぞれに特異な様子として記述しながらも、日本の「子どもがひとりにされることがない」育児様式に感嘆の意を表しており、「日本は子

どもの天国」という記述もしばしばみられる¹⁰⁾。

日本最初の育児書といわれる『小児必用養育草』(1703年刊行¹¹⁾)には、少しずつ歩けるようになった子どもに養育者が積極的に働きかけるべきだとする記述がある。

漸く児立たんとする時は、乳母の類たすけて、「たちたち」といいて、立つ事を教え、漸く歩行せんとする時は、「あゆみあゆみ」といいて、歩行する事を教うべし。富貴の家は、ただその児を愛しすごして、抱きてのみあるによりて、多くは立つ事も遅く、歩行する事も遅きものなり。よくよく心得べきなり。(山住・中江¹¹⁾ p.353)

この書は、専門家が啓蒙的な目論見をもって執筆した書であることから、この記述の裏を読むならば、当時は子どもに積極的に働きかけようとする意識が希薄だったといえるだろう。

江戸時代後期の育児観について検討した是澤¹²⁾は、乳幼児死亡率の高かった江戸時代では、乳幼児への主な関心は「教育」よりも「養育」にあったという。身分制社会として職業の世襲が当たり前であった江戸時代には教育への意識が低く、「乳幼児を『育てる』ことや『しつける』ことに関心が注がれても、意識的に幼児に働きかけ知的発達を促進するという視点は乏しかった」¹²⁾のである。

また、明治期までの風習を紹介した『明治文化資料叢書』¹³⁾のなかにも歩行発達に対する意識を示したものがある。

翌年の誕生日前に既にその児の歩み得るには、一升づきの鏡餅を背に負はしめ、更に背後より突転ばせることあり、その歩みを止むる意なり、これあまり早く生ひたつ児は、命短しといふ俗説あればなるべし。(明治文化資料叢書刊行会¹³⁾ p.180)

こうした風習は、「ウチタオシ餅」や「ブッカエシ餅」と呼ばれ、昔は日本各地で行われており、あまり早くから歩き出すのはよくないと考えられて行われていた地域もあれば、早く歩けるように、丈夫に育つようにと力づける意味で行われていた地域もある(大藤, 1985)。

また、日本には経済的な事情によって育てられない子どもを捨てる「捨て子」の風習があり、捨てられる子どもの多くは体の虚弱さが理由であったが、

それ以外の特徴として、早く歩くようになったということがあった。あまりに利口だったり、器量が良すぎたり、早く歩き過ぎたりするような子どもは、その異常な能力のゆえにかえって将来に危難を招くのではないかという不安をもって見られていたのである¹⁴⁾。

こうした明治までの日本文化における育児観を表した言葉として柳田国男は「児やらい」を紹介している。児やらいとは、子どもを後から追いたてて突き出すという意味であり、前に立って引っ張って行こうとする教育とは違う方法である。児やらいという考えに則って後ろから追いたてながら段階をふんで一人前に育てていくことは、子どもの成長を共同体の内部で確認し、さらに励ますものになっていた¹⁵⁾。これは、日本が共同体全体で子育てを担っていた時代に、子どもの年齢に応じた儀礼を用意することで、社会全体でその子どもの成長を承認していく過程を踏まえている。すなわち、年齢相応の発達を遂げること、生活する共同体に認知された順序で適切に段階を経ることが良しとされていたのである。

「七歳までは神のうち」という言葉にあらわれているように、江戸や明治期の乳幼児期の子どもの生死は非常に不安定であったため、人々はとにかく子どもが無事に生き延びていくことだけを願っていた。そのため、積極的な働きかけによってその発育にいらぬ影響を与えるのではなく、神から授かった運命を温かく見守るべきだと考えられていたのではない

だろうか。

しかし、大正、昭和にかけて、子育てに関わる考え方は変容していくことになる。

柴崎・安齋¹⁵⁾は明治31年に刊行された『育児研究』誌の論説を分析し、明治から昭和にかけての育児観の変遷を辿っている。そのなかで重要と思われるのは、大正期に入ったところから「家庭教育」という言葉が頻繁に用いられるようになったこと、同時に主に母親が子育てを担っていくべきものであるという論説が多く見られるようになったという点である。家庭のなかでの子どもの育ちをいかに母親が担うべきかという問いは、積極的に発達にかかわっていかうとする態度につながる。これは欧米の思想が流入したことや、医療の改善によって少しずつ乳幼児の死亡率が減少したことの影響が大きいだろう。こうした流れは戦後さらに大きくなっていく。

戦後日本の育児と歩行器

戦後になると日本の情勢はそれまでと大きく変わり、文化的価値観も徐々に変更されていく。こうしたなかで子どもの発達への取り組みについても変革が行われ、それを受けて育児に関わる産業が発展していくことになる。そして、時代の変遷に沿って歩行器の需要も変化していく。

戦後の育児への関心の高まりに関連する事項として、60年代に相次いで育児書が発行されたことが挙げられる。これらは『スポック博士の育児書』のよ

Table 1 乳幼児歩行器をめぐる主な施策

1948(昭和23)年	児童福祉法 福祉施設最低基準に保育所の設備に必要な用具として明記される
1974(昭和49)年	消費生活用製品安全法に基づきSGマークの対象商品となる
1982(昭和57)年	国民生活センター危害情報室より乳幼児の歩行器事故解析委員会報告書
1983(昭和58)年	歩行器問題調査研究委員会(通産省)
1987(昭和62)年	児童福祉施設最低基準等の一部を改正する省令の施行に伴い、保育所設備の最低基準を定めた項目に歩行器などの用具の記載がなくなる
1989年	カナダで小売業者により自発的に歩行器の販売が禁止される
1992年	アメリカで米国消費者連合や米国小児科学会(AAP)などの団体が消費者製品安全委員会(CPSC)に歩行器の販売禁止を申し立てるも認められず
1997年	アメリカの消費者製品安全委員会(CPSC)により、歩行器の落下防止基準(stair-fall requirements)が定められる
2004年	カナダで歩行器の使用、販売、広告、輸入が全面的に禁止される

うな欧米式の育児を紹介するようなものや、松田道雄の『日本式育児法』に見られるように、伝承的な育児知識よりも科学的な知見に裏打ちされた育児を強調していた点に特徴がみられる。その一つ、松田道雄の『育児の百科』(1967年)¹⁶⁾には、「オモチャ売場に歩行器がならべてあると買いたくなる。すこしでも早く歩くすがたをみたいからだ。」という一文があり、この後には歩行器の問題点が挙げられたうえで「買ってはいけない」とされており、この文章から当時、歩行器がそれなりに魅力的な育児用具として捉えられていたことが伺える。

戦後の歩行器に関する主要な施策 (Table 1) について見ると、1980年代以降に歩行器の事故に関する報告が出されるようになったことがわかる。こうした事故の問題が取り上げられるようになったのは、歩行器が普及した結果であると考えられる。歩行器の普及を考えるうえで、80年代に歩行器の事故の問題が顕在化するようになる前、70年代の日本の情勢を詳細にみていく必要がある。

転機となる1970年代

1970年代は、戦後のベビーブーム世代が出産・育児期を迎えた時代である。戦後から下がり続けた合計特殊出生率が60年代半ばを境にいったんは上昇したものの (いわゆる第二次ベビーブーム)、1973年の2.14をピークに再び下降し始め、これが21世紀に入るまで収まることなく続くことになる。落合¹⁷⁾は、70年代半ばから再び合計特殊出生率が下降し始めたのを「第二の低下」とし、そこから「戦後」の体制が崩れていく時代が始まったとしている。また、1960年代後半から70年代前半は、日本において「近代家族」の理念と形態が一般化した時期であり、産業構造の変化、都市化、家族の変化、女性の妻・母役割への特化といった社会状況の変化を迎えていた¹⁸⁾。

天堂¹⁸⁾によれば、70年代以降、子どもへの社会的関心が高まると同時に母親の育児責任が強調されるようになり、それまで親族や地域の人間関係に支えられ、複数の手によって営まれていた育児は、母親のみの肩に重くのしかかってきた。その一方で1979年には、過度に子どもに干渉する母親が原因となり、精神的な病気を患う子どもが増えていると指摘した『母原病』という本がベストセラーとなった。その本のなかで著者は、「母原病は昭和30年代頃から、我が

国の文明化、GNPの伸びのカーブに平行して、近年特に目立つようになってきました」¹⁹⁾と指摘している。

この頃から、子育てを独りで担わなければならない孤立した母親の姿が認識されるようになると同時に、母親としての責任が強調されるようになったといえよう。その結果、地縁・血縁的な育児リソースの減少を補うための手段が求められるようになったのである。

こうした変化を象徴する出来事の一つとして育児雑誌の出版が相次いだことが挙げられる。1966年に『赤ちゃん和妈妈』、1969年に『ベビーエイジ』そして1973年に『わたしの赤ちゃん』が創刊され、これ以降、育児雑誌の発行部数は上がり続ける。当時から育児雑誌は、子育ての情報を発信するだけでなく、育児についての母親同士の悩みを共有するためのコーナーを設けており、ここから育児に孤立しつつあった母親の姿が透けてみえる。育児雑誌の隆盛は、子育て情報の流通が変化していったことを表しているといえるだろう。同時に、育児雑誌では数多くの育児用具が紹介され、その便利さが強調された。育児に不安を抱える母親にとって、そういった製品は魅力的であっただろう。

1970年代以降のこうした背景をもとに育児情報メディアや育児用具は発展し、その一つとして歩行器の利用が高まったと考えられる。

しかし、歩行器の普及率は上昇する一方で、その使用に関する問題点が大きく取り上げられるようになる。歩行器の問題は大きく二つ挙げられる。一つは発育への影響、もう一つは事故の問題についてである。次節ではそれぞれの問題について詳しく見ていくことにする。

発育への歩行器の影響

歩行器による子どもの発育への影響については、統一的な見解は得られていないのが現状である。Table 2に歩行器が乳児の運動発達にどのような影響を与えているかを調べた研究をまとめた。歩行器の使用によって這行や独立歩行の獲得が遅れるとする研究もあれば、そうした影響はないとする研究もあった。

日本においては国民生活センターの『乳幼児の歩行器事故解析委員会報告書』²⁰⁾によって、歩行器の発育への影響が論じられている。そこでは、以下の

Table 2 歩行器と運動発達との関連を調査した研究の概要

研究	調査方法	調査対象の概要	主要な結果
Kauffman, I. B., & Ridenour, M. (1977) ⁴²⁾	無作為化比較実験	双子の乳児6名	移動運動時のEMG(筋電図)パターンにおける違いが、歩行器使用群と未使用群とで見られた。(使用群においてひざの屈曲が低下、臀部の屈曲の増加、重心の側方変位などの移動運動の不安定さが見られた)
Ridenour, M. (1982) ⁴³⁾	無作為化比較実験	双子の乳児15名	独力で三歩移動する能力の獲得において、歩行器使用群と未使用群との間に有意な差は見られなかった。
Crouchman, M. (1986) ⁴⁴⁾	質問紙調査 ・縦断データ	8-12カ月齢の子どもをもつ両親66名	歩行器の使用頻度が高い群は、歩行器の低使用群や未使用群と比べて、直立移動の発達に有意な遅れが見られた。
Thein, M. M., Lee, J., Tay, V., & Ling, L. (1997) ²⁸⁾	アウトカム調査 (outcomes research) ・横断データ	7-10カ月の子ども185名	歩行器未使用群は、デンバー発達検査において全て正常値と判定されたが、歩行器使用群の1割程度は異常あるいは異常の疑いの判定結果を示した。
Siegel, A. C., & Burton, R. V. (1999) ²³⁾	アウトカム調査 ・横断データ	6,9,12カ月齢の子ども109名	発達評価にBSIDを使用。歩行器未使用群は、歩行器使用群よりも早く這行を獲得した。歩行器のデザインによって、運動発達と精神発達において低い得点を示した。6カ月時点の精神発達において、歩行器未使用群は、使用群よりも高い得点を示した。
Abbott, A. L., & Bartlett, D. J. (2001) ⁴⁵⁾	アウトカム調査 ・横断データ	8カ月齢の健常児43名	Alberta Infant Motor Scaleにより、運動発達を測定。いくつかの育児用具の使用時間と運動発達との間に統計的に有意な関連。エクサソーサーとの間で正の相関、ハイチェア(high chair)と乳児用イス(infant seat)との間で負の相関。歩行器との関連は見られず。
Garrett, M., McElroy, A. M., & Staines, A. (2002) ⁴⁶⁾	質問紙調査 ・横断データ	26-54週齢の子どもをもつ両親200名	歩行器使用の有無によって、各運動発達獲得までの週齢が異なる。寝返り、這行、ひとり立ち、歩行において差が見られた。いずれも歩行器を使用していた乳児で獲得が遅くなるという傾向。歩行の場合で平均3週の遅れ。
Bartlett, D. J., & Fanning, J. E. K. (2003) ⁴⁷⁾	アウトカム調査 ・横断データ	未熟児で生まれた子ども60名の養育者48名(子ども8カ月齢時)	Alberta Infant Motor Scaleにより運動発達を測定。座位、立位などの運動発達(歩行は検討されていない)と、歩行器、エクサソーサーの使用頻度との間に関連は見られず。
足立 正・嶋崎博嗣・三宅孝昭・服部伸・前橋 明 (2004) ⁴⁸⁾	質問紙調査 ・横断データ	601名の保護者(子ども年齢は不明)	匍匐期間が長く歩行器を使用しない幼児は、歩行器を使用していた幼児と比べ、歩行開始月齢が遅く、歩行開始から蹴動作発現までの期間が有意に短かった。

ような記述が見られる。

這い這いやつたい歩きをする段階で早期に歩行器に入れてしまうことは、首すわりから突然二足歩行へと途中の過程を省略してしまうことになる。これは乳児の発達段階を、自然の法則に従って確実・安全なものにするためにマイナスにこそなっても決してプラスになるものではない。

ここでは、歩行器は乳児の発育にとって「有害無益」であると結論づけられている。

この報告書が提出された翌年には、「歩行器問題調査研究委員会」(通産省、昭和58年)が歩行器による発育への悪影響を否定する結論を出している。歩行器を使用することで正常な発育や機能の発達へ必要な刺激の機会が失われ、這行や伝い歩きの練習が減少してしまうという考えに対し、乳幼児の運動発達は歩行器の使用有無に関係なく、運動発達の順序は様々に見られること、一日中歩行器を使用しているわけではないため、運動機能への影響を心配する必要はないということ、そして、歩行器使用中にも乳児は立つ、歩くなどの動作をしているため、神経の発達を阻害することはないという見解により、歩行

器の有害性を否定している²⁴⁾。

こうした結果をみると、少なくとも歩行器の使用によって運動発達が促進されるという結果は見られなかった。しかし、これをもって歩行器を「有害無益」としてみなすべきかどうかは議論の必要がある。発達のある側面だけを取り上げて論じることが早計である。歩行器によって運動発達に遅れが見られることを問題にするのではなく、乳児の発達全体のために歩行器を位置づけて論じる必要があるだろう。

歩行器を使用する時期には、這行や歩行といった移動運動能力の発達が起きるだけではない。乳児期の歩行獲得と自立性の発達との関連はしばしば言及され、ちょうど生後一年を迎えるころは、乳児の社会生活にとって重要な節目と捉えられている。そのため、歩行器の使用と社会性の発達との関連を検討することは重要な意味をもっているだろう。ところが、社会性の発達に歩行器の使用がどのような影響を与えているかを調べた研究はほとんど見られない。唯一(Gustafsonの研究²⁴⁾)が重要な知見を示しているのみである。

Gustafsonの実験では、生後6カ月から10カ月までの乳児を実験的に歩行器に乗せ、歩行器に乗せる

前と乗せている時の乳児の行動の変化が調べられた。その結果、実験前にひとりで歩けなかった乳児は歩行器に乗ることで実験室をよく探索するようになり、身振り手振り、微笑、発声といった社会的行動が増加した。実験前からひとりで歩行が可能だった乳児にはそうした変化は見られなかった²²⁾。

この結果は、乳児を取り巻くヒトやモノへの対外的な志向において、直立での姿勢や移動の能力が重要な構成要素となっていることを示しているといえる。親が子どもを歩行器に入れて目を離すことができるのは、歩行器に乗っているときには子どもを夢中にさせる何かがあるからである。このことは歩行器の役割を考えるうえで重要である。「有害無益」な用具と断じるのではなく、歩行器を媒介とした社会的な営みに注目することは発達を考えるうえでの新たな知見をもたらす可能性をもつのではないだろうか。

ただ、現実には養育者が子どもから目を離すことができる道具として使用されている例が多く、Siegel & Burton²³⁾ が指摘するように、養育者が育児具としての便利さに依存すれば、乳児期に必要な母子接触が損なわれるという点についてよく考えなければならない。今後、歩行器を媒介として営まれる相互行為そのものを詳細に検討する必要がある。

歩行器における事故の実態

歩行器使用における事故の問題は、国際的に認識されている。米国消費者製品安全委員会 (the U.S. Consumer Product Safety Commission: CPSC) の調査によると、15 ヶ月齢以下の子どもが歩行器に関連した事故によって病院の救急外来で扱われた件数は、1982年には16400件であったが、1991年には26200件に増えている²⁴⁾。また、英国では毎年3000人以上の子どもが歩行器によるケガで救急科を訪れている²⁵⁾。ギリシャのアテネでは、1994年度に49名の乳児の歩行器使用による事故が報告されており、これは該当する年齢の乳児全体における1.6%にあたる²⁶⁾。国別で事故の生起頻度を見ると、アメリカやカナダは高い割合で事故が起き、オランダやノルウェーは事故が少ない²⁶⁾。

親による報告では、歩行器使用者のうちの8～12%が何らかのケガを被っているという^{27) 28) 29)}。年齢別に見ると、8 ヶ月齢やその前後で事故が多く、

また男児に多いという結果が得られている^{30) 31)}。

日本では、昭和57年(1982年)の『乳幼児の歩行器事故解析委員会報告書』²⁰⁾に歩行器に関わる事故の概要が記載されている。この報告によると、昭和55年度から昭和57年までに国民生活センターに寄せられた歩行器の危害情報は63件であった。1999年に国民生活センターが出した『家庭内事故に関する調査報告書』³²⁾のなかでは、乳幼児や高齢者において交通事故死より家庭内事故死のほうが多いことが問題とされ、数は不明だが乳幼児の家庭内事故(特に階段における転落事故)の原因の一つとして歩行器が挙げられていた。

歩行器の事故がこのように問題視されるのは、発生件数の量もさることながら、歩行器使用中の事故が重大な外傷につながりやすいと考えられているからである。歩行器に関わる事故が生じた場合、そのうちの29%が深刻なケガとなっている³³⁾。アメリカでは1973年から1999年までに39件の歩行器使用に関わる死亡事故が報告されており³⁴⁾、1995年のアメリカの小児科医による報告では、年間少なくとも二人の子どもが歩行器による事故で死亡しているという³⁵⁾。歩行器使用中は階段からの落下、転倒が起きやすく、事故の結果として、頭部外傷や裂傷、やけどの被害を生む³³⁾。そのなかでも頭部への外傷が多く、重大事故になりやすい (Figure 3)。

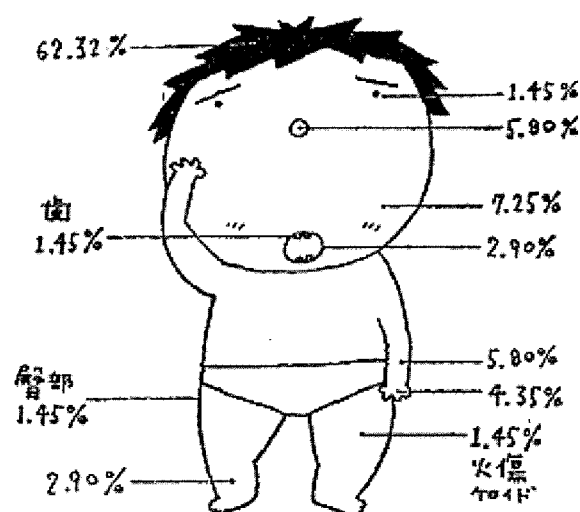


Figure 3 歩行器による事故部分
(国民生活センター危害情報室「くらしの危険」
(No. 14 1978年7月) より)

以上みてきたように歩行器を使用した結果として実際に事故が発生しており、歩行器使用が問題として取り上げられる必然性は認められるといえる。しかし、歩行器の転倒事故が乳児の事故全体に占める割合は低く³⁴⁾、問題の認識のありようには疑問の余地がある。

また、歩行器使用中に事故が起きる原因は、その機能や形状といった歩行器そのものに由来するばかりではなく、養育者の不注意による場合が多い。子どもを歩行器に乗せたまま家事などに従事している間、子どもから目を離した結果として事故が起きるのである。さらに、日本のSGマークの基準によると歩行器を使用してよい月齢は7ヵ月齢以上15ヵ月齢未満となっているが、これはあまり守られておらず³⁵⁾、この結果、事故の危険性が増していることが考えられる。歩行器使用中の事故は、歩行器の構造によるものだけでなく、利用者の意識も大きく関わっており、これにどう対処していくかが重要な問題となるのである。こうした事故への対処については発育への影響を踏まえたうえで後に詳しく述べる。

歩行器の使用抑制についての働きかけ

以上のように事故の問題や発育への悪影響が懸念されているため、歩行器の使用については、各国で使用を抑制しようという取り組みが見られる。

最も大きな動きはカナダ政府による歩行器の禁止である。カナダでは1989年にthe Canadian Juvenile Products Association (CJPA) が歩行器を「安全ではない (unsafe)」と声明したことをうけて、小売業者が歩行器を自主的に禁止するという事態が起きた。しかし、この後も一部の業者によって販売が行われ、歩行器による事故も継続的に報告されていたため、2004年にカナダ保健省によって歩行器は全面禁止されることとなった。

アメリカでも小児科医らによる歩行器使用禁止を訴える声は90年代から見られているが、禁止が実現したことはない。その代わり、歩行器の使用において事故を減らそうとする積極的な取り組みが進められてきた。歩行器の使用禁止を訴える声を反映して最初に行われたのが、事故の警告を示す表示を歩行器に貼付したことである。こうして使用者へ注意の呼びかけを行い、階段や段差で転ばないようにゲートを設置するように促していた。

アメリカでの取り組みは歩行器の使用を前提としたうえで事故予防を狙うものであったが、歩行器の使用そのものを抑制しようとする試みもいくつかある。シンガポールでも歩行器使用率が高いが、看護師によるカウンセリングによって歩行器の事故に関するアナウンスを実施したところ、歩行器の使用率を減少させる効果が見られた²⁷⁾。同様に、Kendrickら²⁹⁾ のイギリスにおける試みでは、パンフレット (educational package) の配布によって、歩行器使用の抑制効果を検討した。

しかし、こうした情報提供が効果的かどうかについては疑問の余地がある。イギリスの調査では、大多数の母親が子どもが生まれる前から歩行器を購入するかどうか決めており、調査対象者の2割が出産前にすでに歩行器を所持していた³⁷⁾。歩行器の購入につながる要因としては、歩行器使用についてパートナーが無関心であることがもっとも影響が高く、他に、最初の子どもであること、借家住まいであることなどが多少の影響をもっている³⁷⁾。さらにアメリカでは、歩行器の購入に対して小児科医から安全性についての情報を得ているかどうかは関係なく、ほとんどの養育者が他者の意見を参考にせずに歩行器の購入を決めているという³⁸⁾。

Rodgers & Lelandの調査³⁹⁾ によれば、こうした使用者に注意を促すような働きかけは積極的な予防 (active prevention) と言われ、アメリカでは実質的な効果を挙げることはできなかった。1994年になると、歩行器そのものを事故が起きにくいようなデザインに変更 (Figure 4) することで事故を防ぐ受動的・自動的な予防 (passive/automatic prevention) が積極的にはかれるようになり、歩行器事故は減少した³⁹⁾。

その効果の有無は別として、諸外国の動向は歩行器の危険性をどう周知していくべきかという問題にシフトしている。日本では、小児科医によって歩行器使用の是非が論じられることがあるが、危険性の周知についての組織的な取り組みは現在のところはみられない。もし、日本で事故や安全性についての情報をアナウンスすることによって歩行器の使用抑制を求めるならば、諸外国における成功事例を参考にしつつ、情報の受け取り方についての文化的相違も考慮する必要があるだろう。



Figure 4 歩行器デザインの移り変わり (Rodgers & Leland³⁹⁾ より一部改変)

歩行器の今後を考えるヒント

現代育児において歩行器のような育児具が必要かどうかは考えてみるべき問いである。近代までの日本では養育者が生業に携わっている間、子どもを放置しておくための手段として「いずめ」や「えじこ」と呼ばれる育児具が用いられていた。「いずめ」は子どもの自由を安全に束縛するために用いられていたが、歩行器はそれほど安全とはいえず、歩行器を「いずめ」などと同じように扱うのは問題である。歩行器を使用する養育者の目的は三つあり、発達を促すため、子どもを喜ばせるため、そして、子どもから目を離すためである。歩行器の今後を考えることは、このような養育者の使用目的にどのように対応していくかを考えていくことである。

歩行器を使い続けるべきか、使用を止めさせるべきか、この選択は文化的、時代的な価値観の変遷に基づいていずれ決まるだろう。さしあたり、現代の趨勢のなかで出されている歩行器のより良い使用に向けての提言や代替案について取り上げておこう。

歩行発達を促すとはまではいかずとも、移動能力の訓練をさせたいという養育者の欲求がある場合には、手押し車（カタカタ）が有効であろう。あるいは、松田¹⁶⁾の言うように、ダンボールの箱などに座布団や新聞紙を入れて重みを増したものを乳児に押し歩かせるのも良いかもしれない。

しかし、手押し車であれダンボールの箱であれ、子どもが押して歩く場合にはまっすぐにしか進まないため、子ども一人で延々と動きまわることはできない。方向転換したり段差につまづかないように養育者の手助けが必要となる。つまり、子どもを自由

に歩かせようとする目的と養育者が片時目を離したいという目的は両立しない。このことを考えると、歩行器はアンビバレントな役割をもった育児用具であるため、使用する目的に混乱が生じ、深刻な事故を招くもとになったということもできる。「育児のための道具」であれば、事故の可能性を減じるためにも、相反する役割を持たせるべきではないのかもしれない。

米国の事故の専門家や消費者製品安全委員会 (CPSC) は、歩行器に代わる育児用具として「エクサーソーサー (Exersaucer)」を提案している⁴⁰⁾。エクサーソーサーは歩行器の形状に類似しており、いくつかの玩具が付随したリング状のテーブルの中心に乳児を配置する構造をしているが、車輪がない。そのため、乳児は移動をすることはできないが、その分、安全に立位姿勢で遊ぶことが出来るというものである。また、子どもの移動性を確保したまま自由に遊ばせておきたいのであれば、プレイペン (playpen) が有用であるとする研究者もいる⁴¹⁾。ただ、こうした提案は、乳児を独りにしておくことを可能にすることを狙ったものであり、乳児が歩くことを補助するという機能を捨象することを前提としている。

歩行器が運動発達の訓練に向いていないことはこれまで述べてきたとおりである。やはり、歩行発達を促進する効果が確かめられていない以上、子どもの歩行発達に効果があるというイメージは払拭した方が良いでしょう。ならば、「歩行器」という名称そのものを変更することが必要かもしれない。今村²¹⁾は、「歩行器」という名称が誤解を招くとして、「移動性

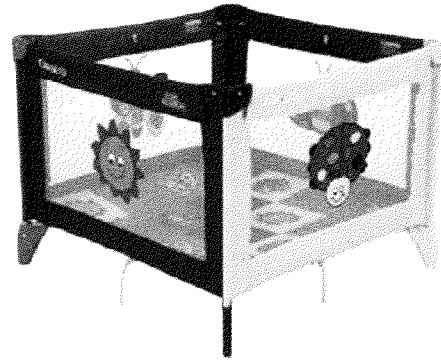


Figure 5 エクサーソーサー（左）とプレイペン（右）

いす」という方がその機能にふさわしいのではないかと述べている。このような働きかけから歩行器の使用に関する考え方の変更を迫ることは十分検討に値するだろう。

まとめ

本論では、歩行器の使用と問題点について歴史的な背景を踏まえながら論じた。以下に重要な論点をまとめる。

歩行器は欧米においては中世より、文化的特徴に影響を受けた子ども観に基づいて使用されていたが、日本ではそうした背景はなく用いられるようになった。日本において歩行器は家族構造、家庭内役割、育児スタイルの急速な変化とともに、輸入され急速に広まった、魅力的な製品だったといえることができる。

歩行器の発達への影響を検討する際には、背景に文化的な発達観が含まれているという認識をもち、運動発達だけでなく、社会的な側面も含めた人間発達全体への長期的な視野に立つ必要がある。

歩行器のより良い使用のためには、歩行器を利用したい養育者の状況に合わせた対応を考えるべきである。まず、歩行器による事故を防ぐために何らかの措置を講じるのであれば、「歩行器」そのものを改善する方が有効性が高い。また、歩行器の利用や事故についての情報提供を行う場合には、情報の受容形態について理解しておく必要がある。そして、代替物の利用を考える際には、歩行器の必要性についての議論を深め、現代育児において歩行器が必要とされるエッセンスを取り出し、これを満たすための新たなツールを求めることが重要である。

以上、歩行発達を取り巻く環境の一つとして歩行

器を取り上げてきた。こうした家庭での育児に利用されるモノのありようは、各家庭の選択に多くを負っている。モノは時代を越えて存在しうが、モノに対する価値観は断続的に変化していく。現代の価値観を相対化し、モノのより良い利用を検討するうえで、歴史・文化的な考察は意義があるだろう。そして、モノ自体に備わる機能と使用者の利用形態の双方において、より良い方向性を模索していくことが必要である。その議論のなかで歩行発達におけるモノの役割がより明確にされていくことが期待される。

注

- 1) SG (Safety Goods) マークは、「消費生活用製品安全法」に基づいて設立された製品安全協会が定めた安全性認定基準に合格した製品に表示される。SGマーク制度は、構造・材質・使い方などからみて生命または身体に対して危害を与えるおそれのある製品について、安全な製品として必要な認定基準を作成している。SGマーク貼付製品の欠陥により生じた人身事故に対して賠償制度がある。

引用文献

- 1) Ariès, P. (杉山光信・杉山恵美子, 訳) : <子供>の誕生: アンシャン・レジーム期の子供と家族生活. 東京: みすず書房, (1980). (Ariès, P.: *L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime*. Paris: Seuli, (1960).)
- 2) 入来 典: 古きヨーロッパの育児習慣と伝統: 第五回 赤ちゃんの運動発達. *チャイルド・ヘルス*, 5, 37-39, (2002).
- 3) Harrison, M. (藤森和子, 訳) : *子どもの歴史*.

- 東京：法政大学出版局。(1959). (Harrison, M.: *Children in history*. the English Agency Ltd. (1996).)
- 4) Rogoff, B.: *Apprenticeship in thinking: Cognitive development in social context*. USA: Oxford University Press. (1991).
- 5) Schorsch, A. (北本正章, 訳): *絵でよむ子どもの社会史: ヨーロッパとアメリカ・中世から近代へ*. 東京: 新曜社. (1992). (Schorsch, A.: *Images of Childhood: An illustrated social history*. New Jersey, USA: The Main Street Press. (1979).)
- 6) Heininger, M. L. S., Calvert, K., Finkelstein, B., Vandell, K., MacLeod, A. S., & Green, H. (田甫桂三, 監訳): *子どもの時代, 1820-1920年のアメリカ*. 東京: 学文社. (1996). (Heininger, M. L. S., Calvert, K., Finkelstein, B., Vandell, K., MacLeod, A. S., & Green, H.: *A century of childhood, 1820-1920*. the Margaret Woodbury Strong Museum. (1984).)
- 7) 入来典: *赤ちゃんの歴史*. 東京: 鳥影社. (2000).
- 8) 加藤 翠: 子育て今昔物語 第9回: 歩行器. *チャイルド・ヘルス*, **2** (6), 33-37, (1999).
- 9) 加藤 翠: 歩行器普及についての考察. *日本女子大学紀要 家政学部*, **33**, 1-9, (1986).
- 10) 森山茂樹・中江和恵: *日本子ども史*. 東京: 平凡社. (2002).
- 11) 山住正己・中江和恵 (編): *子育ての書1*. 東京: 平凡社. (1976).
- 12) 是澤博昭: 江戸時代後期の育児観にみられる「玩具」と「遊び」: 「教育玩具」誕生前史. *日本入形玩具学会誌*, **17**, 142-155, (2006).
- 13) 明治文化資料叢書刊行会 (編): *明治文化資料叢書 第11巻 世相編*. 風間書房. (1960).
- 14) 大藤ゆき: *児やらい*. 東京: 岩崎美術社. (1985).
- 15) 柴崎正行・安齋智子: 『児童研究』誌からみた近代における育児観の形成. *東京家政大学研究紀要*, **43**, 63-70, (2003).
- 16) 松田道雄: *育児の百科*. 東京: 岩波書店. (1967).
- 17) 落合恵美子: *21世紀家族へ: 家族の戦後世代の見かた・超えかた*. 東京: 有斐閣選書. (1994).
- 18) 天童睦子 (編): *育児戦略の社会学: 育児雑誌の変容と再生産*. 東京: 世界思想社. (2004).
- 19) 久徳重盛. (1979). *母原病*. 東京: 教育研究社. (2004).
- 20) 乳幼児の歩行器事故解析委員会: *乳幼児の歩行器事故解析委員会報告書*. 国民生活センター危害情報室. (1982).
- 21) 今村榮一: 育児用品を考える: 1. 生活用具. *小児保健研究*, **46**, 3-7, (1987).
- 22) Gustafson, G. E.: Effects of the ability to locomote on infants' social and exploratory behaviors: An experimental study. *Developmental Psychology*, **20**, 397-405, (1984).
- 23) Siegel, A. C., & Burton, R. V.: Effects of baby walker on motor and mental development in human infants. *Developmental and Behavioral Pediatrics*, **20**, 355-361, (1999).
- 24) Rodgers, G. B., & Leland, E. W.: A retrospective benefit-cost analysis of the 1997 stair-fall requirements for baby walkers. *Accident Analysis and Prevention*, **40**, 61-68, (2005).
- 25) Department of Trade and Industry: *Working for a safer world. 23rd: Annual report of the Home and Leisure Accident Surveillance System -1999 data*. London: Department of Trade and Industry. (2001).
- 26) Petridou, E., Simou, E., Skondras, C., Psitevos, G., Lagos, P., & Papoutsakis, G.: Hazards of baby walkers in a European context. *Injury Prevention*, **2**, 118-120, (1996).
- 27) Tan, N. C., Lim, N. M., & Gu, K.: Effectiveness of nurse counselling in discouraging the use of the infant walkers. *Asia Pacific Journal of Public Health*, **16** (2), 104-108, (2004).
- 28) Thein, M. M., Lee, J., Tay, V., & Ling, L.: Infant walker use, injuries, and motor development. *Injury Prevention*, **3**, 63-66, (1997).
- 29) Kendrick, D., Illingworth, R., Woods, A.,

- Watts, K., Collier, J., Dewey, M., Hapgood, R., & Chen, C. M. : Promoting child safety in primary care: A cluster randomised controlled trial to reduce baby walker use. *British Journal of General Practice*, **55**, 582-588, (2005).
- 30) Smith, G. A., Bowman, M. J., Luria, J. W., & Shields, B. J. : Babywalker-related injuries continue despite warning labels and public education. *Pediatrics*, **100**, e1, (1997).
- 31) Shields, B., & Smith, G. : Success in the prevention of infant walker-related injuries: *An analysis of national data, 1990-2001. Pediatrics*, **117**, 452-459, (2006).
- 32) 国民生活センター：家庭内事故に関する調査報告書：家庭内事故—その実態を探る。（1999）.
http://www.kokusen.go.jp/pdf/n-19990604_3.pdf
- 33) Chiaviello, C. T., Christoph, R. A., & Bond, G. R. : Infant walker-related injuries: A prospective study of severity and incidence. *Pediatrics*, **93**, 974-976, (1994).
- 34) Sweet, D. : Baby walker-related deaths and injuries. U.S. Consumer Product Safety Commission, Bethesda, MD, pp. 36-50, (2002). Available at:
<http://www.cpsc.gov/library/foia/foia02/brief/terminat.pt2.pdf>
- 35) American Academy of Pediatrics : Injuries associated with infant walkers. *Pediatrics*, **108**, 790-792, (1995).
- 36) 長田米子：歩行器は歩く練習にはならないし、おもちゃにしては危険が大きい！．マザーリング，8月号，101-103，(1981).
- 37) Illingworth, R., Kendrick, D., Collier, J., Woods, A., Watts, K., Dewey, M., & Chen, C. : Factors associated with women's antenatal plans to use a baby walker: A cross sectional study. *Health Education Journal*, **65**, 197-210, (2006).
- 38) Bar-on, M. E., Boyle, R. M., & Endriss, E. K. : Parental decisions to use infant walkers. *Injury Prevention*, **4**, 299-301, (1998).
- 39) Rodgers, G. B., & Leland, E. W. : An evaluation of the effectiveness of a baby walker safety standard to prevent stair-fall injuries. *Journal of Safety Research*, **36**, 327-332, (2008).
- 40) DiLillo, D., Damashek, A., & Peterson, L. : Maternal use of baby walkers with young children: recent trends and possible alternatives. *Injury Prevention*, **7**, 223-227, (2001).
- 41) Kendrick, D., & Marsh, P. : Babywalkers: Prevalence of use and relationship with other safety practices. *Injury Prevention*, **4**, 295-298, (1998).
- 42) Kauffman, I. B., & Ridenour, M. : Influence of an infant walker on onset and quality of walking pattern of locomotion : an electromyographic investigation. *Perceptual Motor Skills*, **45**, 1323-1329, (1977).
- 43) Ridenour, M. : Infant walkers: developmental tool or inherent danger. *Perceptual Motor Skills*, **55**, 1201-1202, (1982).
- 44) Crouchman, M. : The effects of babywalkers early locomotor development. *Developmental Medicine and Child Neurology*, **28**, 757-761, (1986).
- 45) Abbott, A. L., & Bartlett, D. J. : Infant motor development and equipment use in the home. *Care Health Development*, **27**, 295-306, (2001).
- 46) Garrett, M., McElroy, A. M., & Staines, A. : Locomotor milestones and babywalkers: cross sectional study. *British Medical Journal*, **324**, 1494, (2002).
- 47) Bartlett, D. J., & Fanning J. E. K. : Relationships of equipment use and play positions to motor development at eight months corrected age of infants born preterm. *Pediatric Physical Therapy*. **15**, 8-15, (2003).
- 48) 足立 正・嶋崎博嗣・三宅孝昭・服部伸一・前橋明：乳幼児期における匍匐期間および歩行器使用と歩行開始以降の運動発達の関連性．小児保健研究，63，442-448，(2004).